

# 伝道+家族歴史=ミニスタリング

— 発想を転換し、家族歴史を活用した伝道を提案する —

**前** 東京北伝道部会長である関口治兄弟は現在、神殿家族歴史部エリアディレクターを務めている。あるとき地域会長会から「伝道部会長としての経験を活かして、家族歴史を用いた伝道を考えてほしい」と言われた。

関口兄弟は、考案した方法を模擬レッスンに仕立て、3つの伝道部に Zoom<sup>※1</sup> 会議で提案、その伝道方法を实地に試して意見をもらうことにした。ほどなく、それぞれの伝道部から報告が入り始める。—「こんな反応は初めてです。すぐに教える人が見つかり始めました！」伝道部や神権指導者向けに Zoomで行った模擬レッスンは評判を呼び、宣教師から話を聴いた会員の要請で開催した Zoom 集会には 200名ほどの人が参加した。福音を学んでいる人に焦点を合わせて家族歴史を用いるこの伝道方法は今、幾つかの伝道部で広がりを見せている。

## 福音を学ぶ人の立場に立って

地域会長会から依頼を受けた当初、関口兄弟は困惑していた。ネルソン大管長が、「もしも今わたしが宣教師であれば、ワード伝道主任とワード神殿・家族歴史相談員の二人がわたしの親友であると言えるでしょう」<sup>※2</sup> と語ったように、伝道と家族歴史活動を結びつける教えはかねてより耳にしていた。しかし、関口兄弟にはその具体的な方法が分からなかった。「わたしは伝道部会長るとき、家族歴史を使った伝道というのは一切やっていなかったんです。」

関口兄弟はさっそく、家族歴史を取り入れている伝道部の何人かの宣教師にその

方法を実演してもらった。そこに共通していたのは、宣教師側からのアプローチだということだ。宣教師自身の家族の写真や家系図を見せて、家族のつながりの大切さ、また神殿の話へと展開していく。



しかし、関口兄弟はこう思う。「最近では家族と一緒にいたくない、結婚したくない、独りでもいいと思う人もたくさんいます。切り口を変え、宣教師側ではなく福音を学ぶ人の立場に立って、人々が関心を持つ方法はないでしょうか。」— そうして提案したのが次のようなアプローチだ。

## 発想の転換① 相手にメリットのあることを提案する

例えば、出産を控えているパートマンの姉妹がいたとする。たとえ、夫があまり福音に関心がなかったとしても、「それは構わないので、生まれてくる子供のために記録を残されてはどうですか」と語りかける。「お二人がどういう思いで生まれ

てくるお子さんを待っているのか、今しか残せないのか、ご主人と一緒に自分たちの声で録音してはどうですか。心音やエコー写真も一緒に保存したらどうですか。」— 妊娠したと聞いて涙したこと、エコー検査でお腹の中の子供の画像を見てほっとし、力強い心臓の拍動に感動したこと。お腹の赤ちゃんに語りかけながら、良いお母さんになると決意したこと。無事を祈りつつ、指折り誕生を待ちわびていること……生まれてくる子供に残したい言葉が次々に湧いてくる。夫と共に語りかける言葉は、将来自分たちに何かあったとしても、永遠にその子を力づけてくれるだろう。—「とってもやりたいです。すごく興味があります！」

関口兄弟は、この提案に目を輝かせる人と実際に出会った経験がある。教会が提供するアプリ「FamilySearch 思い出」を使えば、そうした画像や写真、音声、録音データなどをスマホから簡単に記録できる。それらは教会が提供するワールドサーバー上で半永久的に保存される。

宣教師と一緒に学んでいる人に、「次回は『思い出アプリ』を一緒にやってみましょうか」と勧めると、たいていの人が「いいですね」と反応するという。

## わたしたちも忘れられる

「あなたは2人のおばあちゃんの旧姓が言えますか？」

関口兄弟は、以前に中学校へ招かれて講演をしたとき、約200名の生徒にこう問いかけた。祖母の旧姓を言えたのはわずか1~2名だった。後に日本東京北伝道部会長を務めたとき、宣教師に同じ質問を

※1—インターネットを介したテレビ会議システム

※2—「ルーツテック2018 レンランド長老の指導者訓練セッション」より  
<https://www.familysearch.org/blog/jp/renlund/>



<https://www.familysearch.org>  
(LDSアカウントでサインイン, またはゲストとして続ける)

FamilySearchの「アクティビティ」から「わたしのストーリーを記録する」をタップすると、「家族のストーリー」や「友人との記録」など9つのジャンルが提示される。さらに開くとそれぞれ10個前後の質問が出てくる。「自分にとって最高のヒーローは誰ですか」「いちばんの親友はだれですか」など、質問を見ながら文字や音声で答えていく。関口兄弟はこれを伝道に使えないかと考えた。

してみても同様だった。家族歴史の大切さを知っている人でも、なかなか祖母の旧姓を思い出せない。「言い換えれば、わたしたちも2世代もすると忘れられてしまう存在なのです」と関口兄弟は言う。それはかなり衝撃的な事実だ。

関口兄弟はさらに、ゲームのように語りかける。「あなたにとって大切な写真を見せてください。どういう写真なのか内容は言わないでください。わたしが当てますから。」関口兄弟が一通り推測したあと、本人に写真について説明してもらう。

スマートフォンや携帯電話が普及した今、わたしたちは手軽に写真を撮ることができる。誰の端末の中にもきっと、大切な写真があることだろう。1枚1枚の写真には、その人にしか分からない、かけがえない思い出がある。それを記録しておかなければ、あなたの死後、その写真の意味は忘れ去られ、捨てられてしまうに違いない。<sup>※3</sup>

毎年開催される家族歴史の世界的祭典「ルーツテック」では近年、子孫のために、写真とそれにまつわるストーリーをセットで記録することが大いに勧められている。自分が忘れられる未来を想像したとき、教会員であるなしを問わず多くの人が関心を抱くのではないかな。

一方で、文章で記録することに苦手意識を持つ人、教会で長年推奨されている日記をつけることに挫折した人も多いかもしれない。

### 発想の転換② 日記を書けなくても写真を選んで語ればいい

デビン・アシュビー兄弟はルーツテックにおける講演で、「これまで日記を付けてこなかった人でも大丈夫!」とわたしたちを励ます。「日記を書く一番簡単な方法は

写真について書くことです。何もない白紙を見ているとイライラするものです。でも、写真があればそれだけで何かが見えたり思い出せたりします。」<sup>※4</sup>

「FamilySearch 思い出」アプリでは、写真を保存し、写真に関連する思い出や物語を、文章のみならず、音声録音の形で記録することができる。インターネット環境さえあれば、フェイスブックやインスタグラムとも連動しているので、そこから写真を自在に取り込んで、いつでも、どこでも記録できる。しかも永久保存されるため、「後世の人があなたの声を直に聞いて、こういう思いで、こういう場所で撮ったのだと知るすばらしい記録になります」と関口兄弟は勧める。——「わたしも日記を書けない日があったし、書くことがなくて日々の出来事ばかり書いていたようにも感じます。でもそうじゃない、もっと大切なことがあるんじゃないかなと。ただ写真を選んで思い出を話せばいいのです。やってみたら、結構簡単なんですよ。」

何を話せばいいのかと気負うことはない。「子供たちは親の成功談、自慢話はあまり聞かないんですよね。『ふーん』という感じで。ところが、『忘れ物を取りに帰る途中で転んで、ズボンが破れてお母さんに叱られ、学校に戻っても先生に叱られたんだ』と話すと、子供たちは『ばかだなあ』と大笑いして盛り上がるんです。後世の人にとっては、良い話よりも失敗した話から学ぶことが多い。子孫と共通点になるような失敗談、悲しかった話の方が価値があると思います。わたしの記録の中にはそれが多くいんですよ。」

### 発想の転換③ 文字から音声へ

関口兄弟は、「書くときには話すほどの力もない。」<sup>※5</sup>の聖句を引用し、記録

の際には音声録音機能を使うことを勧める。それは、簡単に記録できるという以上の意味がある。

模擬レッスンにおいて関口兄弟は、福音を学ぶ人に、幼い頃の写真を次回のレッスンへ持って来てくれるように依頼する。「お父さんかお母さんに連絡を取って、それがどういうときの写真なのか、どういう子供だったのか、どういう理由で名前を付けたのかを聞いておいてください。ご両親にとってもすばらしい経験になりますから。よろしければ、おばあさんにも参加してもらって、彼らの肉声でそれを語ってもらいましょう。アプリの使い方はわたしたちがお教えますから……。」

関口兄弟は、喜びを感じてほしい人を垣根なく招いていく。親は子育てに夢中だった頃の懐かしい思い出に浸り、子供は親の愛に圧倒されて満たされる、両者共にかけてがえのない経験となる。

かつて関口兄弟が、亡くなった弟の思い出を残すため教会員ではない母親に

にも相談したものの、どんな慰めや励ましの言葉も心に響かず、助言を求めて連絡したのだという。関口兄弟はひとしきり話を聞いた後、明るくこう投げかけた。「わたしもあなたが納得できるような話は何もできないと思います。それより5分くらい一緒にゲームをしませんか?」

「えっ、わたしは悩んで相談しているんですよ。」

「でも付き合っただけいいですよ。」  
ふてくされたような表情の彼女に、ファミリーサーチの機能の一つ「わたしのストーリーを記録する」を開いて画面共有で見せながら、「一般的な質問」をはじめ、「楽しいことや面白いこと」「家族のストーリー」「目標や達成したこと」「心と精神」「深く考える, 振り返る」「霊的な面」……

様々なジャンルから質問を順番に投げかけていく。彼女は、投げやりな態度での即答から、徐々に考え始め、思い巡らし、涙を流しながら一生懸命答えて続ける。

この機能では自分で質問を作ることでもできる。関口兄弟は自ら質問を書き込む。「最後の質問です。『それでもあなたは神様から愛されていると思いますか?』はいどうぞ。」

関口兄弟は、手で涙を拭いながら何度もうなずく彼女を優しく見つめた。「わたしはあなたに何も言ってあげられなかったけど、何か答えが見つかりましたか?」

「はい。何となく分かりました。」ほっとした表情からはもう悲壮感は消え、笑顔も戻っていた。

——「何かから解放された印象を受け、わたしの方が希望を感じる瞬間でした。友達も指導者もわたしも適確なアドバイスは何もできませんでした。でも、自分のストーリーを語ることで、彼女は自分で答えを見つけることができたんです。彼女は

語りながら自分で気づいていったのです。自分から行動を起こすことで、内面に大きな変化が生じたのです。」

### 発想の転換④「宣教師が語る」から「福音を学ぶ人に語ってもらう」へ

関口兄弟は、宣教師のレッスンを見て、9割くらいは宣教師が話していることに気が付いた。学ぶ人が話すのは「はい。うん。難しいなあ。まあいいことだと思いますよ」くらいだ。関口兄弟は「わたしのストーリーを記録する」の幾つかの質問の答えを、学ぶ人自身に語ってもらうようにと提案する。「最初は少ししか話さなくても、続けて質問に答えてもらううちに、その人の関心がどこにあるのか、福音のどこを教えるべきかが見えてきます。」そして、関心事を抱えている悩みなどもふまえて、宣教師はレッスンの順序をその人に合わせて組み替えていく。「この方法によって、レッスンを最後まで受け続ける人の割合が上がっているように思います。」

### ミニスタリングの精神——その人・地域・伝道部に合わせた方法で

相手に合わせて助けるという発想の転換——この方法は、ミニスタリングの精神そのものだ。教会から少し足が遠のいている会員や、パートメンバー、新会員、英会話や様々な活動を通じて知り合った友人たちなどに一番効果的だと関口兄弟は実感している。しかし、自分が提案した通りのレッスンを全国一律に行うのではなく、各々の伝道部の特徴に合わせて丁寧にカスタマイズしてほしい、と強調する。これもまたミニスタリングの精神である。「色々考え、試し、話し合っ、地域の関心やニーズと宣教師の気持ちが一致していればいいな、と思います。」◆





# 「永遠の宣教師」でありたい

——山口地方部山口支部 大岬祐希姉妹

大岬ご家族  
左から、二女の瑞喜姉妹、長女の祐希姉妹、母親の千鶴代姉妹  
作和くん、三女の和希姉妹、美和ちゃん

大 岬祐希さんは1993年1月、山口県山口市にて三姉妹の長女として生まれた。母親の千鶴代さんは流産を繰り返し、これを最後にしようと思っていた矢先の待望の娘であった。

しかし、その家庭環境は複雑なものだった。祐希さんの両親は知人からの紹介を受けて結婚した。しかし、結婚した翌日から夫は豹変し、家庭内暴力が始まる。「ご飯のおかずが気に入らないからと父がテーブルをひっくり返して、飛んだ茶碗が妹に当たってけがをする、ということもありました。」夫の経営していたレストランで千鶴代さんは朝早くから夜遅くまで働き、他の従業員からのいじめを受けた上に、給与は支払われないという有り様だった。結局、千鶴代さんは祐希さんが4歳のときに離婚し、娘たちとともに実家に身を寄せる。しかし実家も心から安らげる場所ではなかった。「祖母はお見合いで祖父と結婚したんですが、親から決められた結婚に思うところがあったみたいで、あまり良い雰囲気ではありませんでした。」

## 誰かの役に立ちたい

祐希さんには、物心ついたころから「誰かの役に立ちたい」という思いがあった。

小学生の頃にはユニセフの募金箱に自分のお小遣いを寄付し、中学生の頃にはボランティアコーディネーターとして老人福祉施設の方々の車いすを押すなど、地域の奉仕活動に参加した。「自分が何かをしたことによって相手が喜んでくれたらうれしいという気持ちがありました。」

そして「誰かの役に立ちたい」気持ちは祐希さんの進路選択にも関わった。

中学3年生の夏、祐希さんが高校進学について考え始めた頃、すぐ下の妹の瑞喜さんが発病する。「睡眠時、突然呼吸が止まるという発作が起きるようになったんです。検査を受けて分かったのは、脳腫瘍と、先天性のキアリ奇形でした。」医師に「確実に生存できるのは5年以内でしょう」と告げられたその晩、祐希さんは母親と一緒に泣いた。

その後、瑞喜さんは水頭症の手術と、6時間にも及ぶキアリ奇形の手術を受け、小脳の圧迫は解消された。腫瘍については部位が悪く手術ができないため、対症療法を行うのみとなった。このときの経験は祐希さんの心に深く刻まれた。「瑞喜の病気を通して、同じように病気で苦しんでいる人に寄り添って役に立てる人になりたいと思うようになりました。」

ちょうどその頃、県内の高校の説明会が開かれる。数ある高校の中から祐希さんの心を捉えたのは、県立防府高校衛生看護科だった。通常、看護師になるには高校卒業後、3年制もしくは4年制の看護専門学校か、4年制大学の看護科に通い国家試験の受験資格を得なければならない。しかし、この学校なら高校3年・専攻科2年の5年間一貫教育で正看護師の受験資格が得られる。最短コースであり、公立高校なので学費も安い。「説明を聞いて、ここしかない、と思いました。何より心にぴんとくるものがあったんです。改宗する前でしけど、思い返してみるとあれは御霊のささやきだったと思います。」

## 人生は修行のようなもの?

2008年、祐希さんは希望通りに防府高校衛生看護科へ進学する。2年生のとき、母親と妹2人とともに実家を出て家を借りることになった。体調を崩して東京から実家に戻ってきた叔父と、母の千鶴代さんとの折り合いが悪かったためである。母娘の生活は経済的に厳しい面もあり、祐希さんでもできる限り協力した。「奨学金をもらって、アルバイトもして、それで学費や学校までの交通費をまかないました。」

祐希姉妹のバプテスマ会にて。前列左から教えてくれた宣教師の岡田真希長老と馬淵光司長老、後列右端は衛生看護科の友人の岡井柚禪姉妹。後列左側は祐希姉妹の改宗を助けてくれた大垣ご夫妻。「兄弟の趣味は奥さんです、って聞いてビックリしました」(祐希姉妹)



祐希姉妹が家族を誘ったクリスマス会にて

経済的な問題もあって、普通の高校生とは悩みも違っていただろうかもしれない。

当時の祐希さんの心には、母からの教えがあった。「人生の目的は自分の魂を磨くためにある、自分の磨かれた魂の度合いに従って死んだ後に行く場所が決まる、って。だから、いろいろ大変なことがあっても、修行みたいなものだから仕方がないか、と。」

専攻科2年の夏休み、最終学年として来るべき国家試験の勉強に励みつつも、家族や経済的なことも気がかりでストレスに満ちた毎日を送っていた。そんなとき、祐希さんは防府の宣教師たちに出会う。

## 人生は喜びを得るためにある

初めてのレッスンは全てが新鮮だった。防府支部の会員たちの姿も祐希さんに衝撃を与えた。「教会員の若いご夫婦がいて、とても仲が良かったんです。わたしの両親は離婚していましたが、祖父もあまり仲が良くなく、友達も両親が離婚してる子がいったりと複雑な家庭も多かったの、仲がいい家族は幻想だと思っていました。また、『人生は喜びを得るためにある』という宣教師の言葉が、文字通りわたしの心の琴線に触れました。人生は修行のようなもの、と思ってきたので。その長老たちの言葉を聞いたときに御霊を感じて……これまでの問題は天のお父様がわたしを愛しているから与えてくださったと分かりました。」——そのとたん、祐希さんの目からは涙があふれて止まらなくなった。レッスンは終わり、車で防府駅まで送ってもらう間も泣き続けた。

「電車に乗っている間の1時間、ずっと御霊を感じて泣いていました。どんどん通り過ぎていく夕暮れの街並みを見ながら泣いて……それから、今感じているこ

の御霊をもっと感じたい、もっとレッスンを聞きたいって思ったんです。」

それからは、幸い夏休みでもあったので福音漬けの日々を送った。数日おきに教会に行き、国家試験の勉強の傍ら、宣教師からレッスンを聞いて過ごした。自身の心が軽くなっていくのを感じた。

## 背中が熱い!

9月16日、日曜日の集会後にレッスンを受けた祐希さんは、宣教師からバプテスマを提案される。「夏休みが終わって看護実習もあって、すごく忙しい時期でした。バプテスマを受けたら生活が変わる、そのことに迷いもあって、その場では答えられませんでした。」

その日の夜、祐希さんは自室にこもってひざまずいた。

「天のお父様、わたしはバプテスマを受けたほうがよいでしょうか。」——そう祈った瞬間、祐希さんは異変を感じる。

「背中が急に熱くなったんです。」

肩甲骨の間あたりに、いままで経験したことのない熱さを感じた。「祈っていたときは火傷しそうなほど熱くて……それからずっと、祈らなくても一週間ほど背中全体が常に温かい状態が続きました。」祈りの答えだ——祐希さんは確信した。バプテスマを受けるのは正しいことだ、と。

2012年9月29日、大岬祐希姉妹は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になった。「わたしはずっと、どうしたら人の役に立てるのか考えて生きてきました。教会のみんながキリストのようになれるよう努力している姿を見て、わたしの居場所を見つけたと思いました。」

周りの人に仕えることを人生の命題として生きてきた祐希姉妹にとって、自分が手に入れた最も良いもの、福音を分かち合い

たいと願うことは自然の流れだった。

バプテスマを受けた年の12月、教会で行われたクリスマス会に家族を誘った。参加してくれた母・千鶴代さんに祐希姉妹はモルモン書をプレゼントする。しかし、その時の答えは「モルモン書は読まないし、クリスチャンにも興味ないから」というそっけないものだった。

それでも祐希姉妹の心にともった伝道の火は消えなかった。2013年4月から兵庫県尼崎市の病院で看護師として働き始めるや、「病棟の同期の子には、自分が教会に行っていること、お酒を飲まないことを自己紹介で真っ先に伝えました。」信仰を第一にするスタンスを守りながら、自然に福音を分かち合っていた。

## 試練の日々

就職して1年がたった。仕事にも教会にも慣れ、充実していたが、夜勤もある病棟勤務は激務だった。しばしば業務の抜けやもれが生じることがあり、祐希姉妹は悩んでいた。「もともと忘れっぽいところはあったんですが……気を付けていても何かを忘れることが多々ありました。」もしかしたら、自分はADHD(注意欠陥多動性障害)なのかもしれない、そう思った祐希姉妹は専門の病院を探して受診する。診断結果はグレーゾーンで、投薬治療を始めた。「でもあまり効果がなくて、副作用のほうが強い感じでした。一緒に飲んでいて精神安定のための薬も合わなくて、いつも暗い重苦しい気持ちになってしまいました。」

もともと自分はそこまで要領が良いタイプではなかった、と祐希姉妹は言う。「高校の頃、合唱部だったのですが、人より早く来て朝練をしたり、部活の後も自主練で残って、帰るのは人より後で。それで結果

Missionary—  
最も良いものを分かち合う

防府の長老たちと。左から岡田真希長老、友人の岡井姉妹、祐希姉妹、武田聖牙長老

祐希姉妹が福音を学んだ防府支部

家の竹やぶの手入れに来てくれた長老たちと

和希姉妹の聖典、和希姉妹を教えてくれた長老たち手作りのカバーに入っている

千鶴代姉妹と瑞喜姉妹を教えてくれた蒲田ユージン長老、佐藤良平長老と

瑞喜姉妹のバプテスマ会にて

和希姉妹の娘の実和ちゃんモルモン書を読みたくてたまらず自分で文字を覚えた

和希姉妹のバプテスマ会にて教えてくれたハル・木村・ケンシ長老(左)と芥 昂宏長老(三人とも熱い長老で、その熱意にも押されました) (和希姉妹)

的に人よりもうまくなれるっていう感じでした。要領が良くない分、人よりも努力すればいいって思っていたんですが……。」

ある夜、夜勤中の祐希姉妹は業務の抜けを先輩の看護師に指摘され、「抜けたりするのは努力したら補えることなんだから、努力して気をつけて」と注意される。

「でも、服薬もして、自分なりに気を付けているつもりなのに抜けるんです。努力しても駄目なら、もう頑張りが分からない、と気持ち追い込まれていきました。」

夜勤を終えて家に帰った祐希姉妹はただ泣き続けた。次の日は日曜日だったが教会にも行けずに泣いた。そして月曜日、祐希姉妹は仕事に行けなかった。欠勤の連絡をすると、師長に病院を受診するように言われた。医師からは、強い抑うつ状態であると診断され、祐希姉妹はそのまま休職することになった。

## 真の改心

休職していた日々について、祐希姉妹は「かつてないほど折り、聖典を読んだ日々でした」と振り返る。

勤務の都合でこれまでは行けないことも多かったインスティテュートに出席し、朝は自転車をこいで、教会で行われていたセミナーにも顔を出した。

そして、自身がどれほど落ち込んでいても、祐希姉妹の「誰かの役に立ちたい」と思う気持ちは失われなかった。

「就職してから何回か東日本大震災の復興ボランティアに行っていたんですけど、休職期間中も1週間ほど、岩手県石巻市で漁師さんのお手伝いをしました。」

宣教師の集会に参加させてもらったり、別のエリアの宣教師のレッスンと一緒に参加して助けたりもした。

熱心に奉仕に打ち込んでいたが、「心

がしんどくて苦しく、長いトンネルの中にいるみたいだと思日もありました。」そんなとき、祐希姉妹を慰め、励ましてくれたのが聖文だった。「わたしの聖典の第一一ノファイ17章3節のところ『どんな苦難の中にあっても神様を信じ、戒めを守るならば、神様は苦難の中で光となり道を備えて下さり乗り越える方法手段と恵みを与えて下さる』って当時のわたしは書き込んでいるんですけど、リーハイ家が8年の荒れ野の旅の後に祝福を感じる様子とか、当時の状況と照らし合わせてすごく希望をもらっていました。」

こうして、聖文を読み、祈り、奉仕した日々は祐希姉妹を少しずつ癒し、かけがえのない証を与えてくれた。「それまでは、自分の中にイエス・キリストの贖いについての証はあまりなかったんです。でもこのとき、主の贖いによる癒しと力を感じて乗り越えることができ、また喜びに満たされて生活することができるようになりました。弱い時にこそ強い<sup>※1</sup>というイエス・キリストの贖いの証を得ました。わたしの真の改心はこのときだったと思います。」

## 今がタイミングだ!

2014年の4月末、休職中だった祐希姉妹は山口県の実家に帰省し、家族は温かく迎えてくれた。「楽しかったんですけど、福音について話せなかったことがすごくつらかったんです。関西にいる間にインスティテュートを通して、福音を学び合い、分かち合う喜びを知りました。だから大好きな福音を大好きな家族と共有できないこ

とに、物足りなさや寂しさを感じました。」

祐希姉妹は、家に帰って自室にこもり、主に祈った。自分の心を注ぎだし、祈り終わったとき、部屋に入ってきたのが母の千鶴代さんだった。今がタイミングだ、と感じた。祐希姉妹は母親に自身の置かれている状況を話した。仕事の上で厳しい試練にあったこと、でも福音の力を通して乗り越えることができたこと……。「お母さんにとって大切なものがあることは知ってる。でもわたしは、わたしの大切な家族に、大切な福音を知ってもらいたいと思ってるよ、って伝えたら、母は一言『分かった』って言ってくれました。」

5月の連休、防府支部の若い女性キャンプに、祐希姉妹はすぐ下の妹の瑞喜さんを誘った。若い姉妹たちと打ちとけ、瑞喜さんはキャンプを心から楽しんだ。その帰り、千鶴代さんと瑞喜さんを宣教師に紹介することができた。

祐希姉妹が尼崎に戻った後、宣教師たちは大岬家族のために奉仕してくれた。「実家の竹やぶの手入れをするを手伝ってくれたんです。汗だくになって竹を切って、運んで、焼いて、っていうのを来る日も来る日も。」宣教師たちの純粋な愛に触れた千鶴代さんの心は次第に開き、レッスンを受け始める。幼いころから霊的な感受性が鋭く、様々な宗教を学んできた千鶴代さんはこう語る。「いつもどこかで違和感があってやめてしまうんです。これはわたしの求めている宗教じゃないって。」

しかし、キリストの福音はどれだけ学んでも千鶴代さんに違和感をもたらさな

かった。そしてバプテスマについて学んだとき、千鶴代さんの中で何かが腑に落ちる。「ずっと、自分は水で死ぬ、というイメージがありました。水に関わる事故ということなのか、意味は分からなかった。でも、バプテスマの意味について学んだとき、わたしがずっと抱いていた水と死のイメージは、水に沈められて新たに生まれ変わるバプテスマを表していたんだとはっきり分かったんです。これだったのか、と。」

7月、尼崎の祐希姉妹に、防府支部の親しい会員から弾んだ声で電話が入る。「お母さん、バプテスマを受けるって!!」

「ええ?! って思わず耳を疑いました。母は結構頑固だし、自分の信じるものははっきりあるイメージだったので……レッスンは受けてもバプテスマは受けんやろな、って思っていたんです。」家族が福音を受け入れる。驚きと喜びがあふれ、祐希姉妹の涙は止まらなかった。

千鶴代さんは2014年8月10日にバプテスマの水をくぐった。7月末に仕事を辞めて山口に戻った祐希姉妹もバプテスマ会に出席した。「母はすごく幸せそうでした」と祐希姉妹は喜びとともに回想する。

千鶴代姉妹のバプテスマを皮切りに、大岬家の喜びは続く。同年9月26日に瑞喜さんがバプテスマを受けたのである。

障害があり文字を読むことが苦手だった瑞喜姉妹は、バプテスマに備えて熱心にモルモン書を学び、スムーズにモルモン書を読めるようになった。その変化に祐希姉妹は主の御手を感じたという。「以前、妹は人と関わることが苦手な物静か

な子でした。でも教会員や宣教師と接するうちに、にぎやかで明るくなって、今ではうるさいくらいです(笑)。」

翌年の2015年6月、祐希姉妹は専任宣教師として神戸伝道部に召された。

## 祖父の死と家族の溝

2016年3月の断食安息日、祐希姉妹は教会で集会前の伝道調整集会に出席していると、通知音とともにメールが届く。元気だった祖父が突然亡くなったことを知らせる母からのメールだった。

「あまりのショックに心がついていきませんでした。そんなに甘えたりはできなかったけれど、わたしにとってはいいおじいちゃんだったので。」その日はアパートにこもり、祖父を思い出して涙にくれた。

祐希姉妹は伝道部会長の許可を得て、教会員ではない下の妹の和希さんに電話をする。葬儀に参列できない祐希姉妹のせめてもの思いだったが、名乗った瞬間に電話を切られた。何が起こったのか分からない祐希姉妹の元に、和希さんから心ないメールが届くようになる。妹の豹変に祐希姉妹は戸惑った。

その頃、怪我をした祖母の代わりに始めた仕事で安息日を守れなくなったことを契機に、千鶴代姉妹の足が教会から遠のいた。「祖父が亡くなってつらい上、辛辣な言葉が届いたり、母と瑞喜も教会に行かなくなったりして、かなりしんどい時期でした。神様は家族が永遠に過ごせるための道を備えて下さるって知っているけれ

ども、そうじゃない現状にどうしたらいいか分かりませんでした。それでも、わたしたちは岩を押し続ける必要があって、岩を動かして下さるのは主だと。そう思って気持ち奮い立たせました。」

伝道もあと半年を切った2016年の夏、祐希姉妹は和希さんが妊娠、入籍したことを知る。妊婦でも歩きやすい靴を買い、和希さんに贈った。しばらくして祐希姉妹は和希さんからメールを受け取る。「姉ちゃんからももらった靴を履くと、他の靴とは違って捻挫もせずに歩けるから、破れても直して大切に使ってるよ」って。わたしを責めていた頃からは想像もつかないほどの変化を感じました。」その年の暮れ、祐希姉妹は1年半の伝道を終えた。

\*\*\*

2017年4月、和希さんは無事に娘の実和ちゃんを出産した。間もなく和希さん夫婦は、それまで住んでいた宇部市から山口市へ引っ越してきた。防府支部の長老たちが引っ越しの手伝いに来てくれたことがきっかけで、和希さんのレッスンは始まった。うれしいことに、千鶴代姉妹と瑞喜姉妹も再び教会に集い始めた。そして和希さんはバプテスマ志願者となる。

しかし予定されていたバプテスマ当日の朝、バプテスマを受けたくない、受けるべきではないという強い反対の力を感じた和希さんは布団から出ることができなかった。そしてそのままレッスンをやめ、教会からも離れた。

2人目の子供を授かったタイミングで和希さんは、千鶴代姉妹たち家族と同居するようになった。手狭になったため、祐希姉妹は家を出て一人暮らしを始める。この引っ越しは祐希姉妹にとってもつらいものだった。「わたしの伝道前に長老たちから



和希姉妹はバプテスマのときにもらった花をドライフラワーにして大切に飾っている

もらったモルモン書を和希はずっと持っていたんですが、ぼんと返されたんです。和希は今、福音に興味がないんだな、と思いましたね。」

### 時が来た

それから1年後の2020年11月、和希さんはある光景を目にする。娘の実和ちゃんが祈りのポーズをとっていたのである。誰も祈りについて教えたことはなかった。「お祈りしなくていいの?」と言う3歳の娘のその姿に、和希さんは祈らなければならぬのかも、と考え始める。ほどなく実和ちゃんは、「なんで教会に行かないの? みーちゃん教会行きたい」と言うようになった。娘の熱意に負けた和希さんは子供たちを連れて聖餐会に出席した。

和希さんの心が神様に向いていると感じた祐希姉妹は、長老たちに連絡を取り、1月の和希さんの誕生日に家を訪問してくれるように約束を取り付けた。しかし誕生日当日、和希さんは風邪で寝込んでしま

う。事情を話して訪問は断ったが、長老たちと夫婦宣教師はサプライズで大岬家を訪問し、和希さんに神権の祝福を授けた。仕事で不在だった祐希姉妹は和希さんからのLINEで事の次第を知る。「体調を崩して最低の誕生日で思っていたけど、祝福をしてもらって神様の愛を知れたので最高の誕生日になったよ」。祐希姉妹は、和希さんの時が来た、と確信した。

そして、再びレッスンが始まる。福音と真剣に向き合った和希さんは、宣教師や祐希姉妹に積極的に質問をし、長距離運転の際には車内でモルモン書の朗読を流した。「眠いと思ったら気になる単語が出てきて、繰り返して聞いていたらいつの間にか到着してたよ。」深く学ぶうちに疑問がなくなり、「今までの苦しみはすべて、神様を知るために必要だったと思う」と祐希姉妹に打ち明けた。「幼い娘の尊い行いにイエス様の教えを見た」という和希さんの変化はめざましいものだった。

2021年4月18日、和希姉妹は待ち望ん

でいたバプテスマを受けた。水に沈む一瞬、福音を学んだ日々が和希姉妹の脳裏をよぎる。「長いようで短い、わたしにとって大切な6年半が走馬灯みたいに通過ぎて……水から上がったときは、全力疾走した後みたいな清々しい気持ちと、清められたという実感がありました。」

\*\*\*

祐希姉妹は自身の改宗と、家族が福音に導かれた8年間に思いを馳せる。「ホランド長老は、『神様は壊れたものを愛しておられる』※2と言われました。わたしの家族は長い間壊れていました。だからこそ主は、壊れたわたしたちを愛してください、そこに贖いの力を注いでくださったのだと感じています。」——自分たちに喜びと幸せをもたらしてくれた福音を力の限り伝えたい。「生涯の目標は永遠の宣教師です」と祐希姉妹は瞳を輝かせている。◆

※2 「壊れたものを修復する贖いの力」ジェフリー・R・ホランド長老のディボーションナル、「リアホナ」2017年4月号、ローカルページ L4 参照

## 今月のNews Headlines ● ニュースルームはこちら! <https://news-jp.churchofjesuschrist.org>



- **新たに召された地域七十人・今井裕一長老** 7月25日リリース
- **東京オリンピックで競技する末日聖徒の紹介** 7月25日リリース
- **聖なるものに心を向ける** オンラインで行われた2021年度名古屋地区シニアカファレンス 7月29日リリース
- **世界中からアスリートたちが東京に集まりました** ネルソン大管長の Facebook 投稿より 8月1日リリース
- **東京オリンピックに出場した末日聖徒:5つのメダル獲得と数々の記録を残す** 8月10日リリース
- **アジア、アジア北、フィリピンにおける神殿の再開** 8月13日リリース

※上記リストは日本発信または日本に関連する記事のみです。海外発信記事(日本語)も数多く配信しています。

## 役員の変動

2021年7月23日から2021年8月22日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- |                                  |                                 |                            |
|----------------------------------|---------------------------------|----------------------------|
| ● 東京西ステーキ相模原ワード<br>ビショップ: 神崎 浩二郎 | ● 名古屋東ステーキ岡崎ワード<br>ビショップ: 山田 行彦 | ● 日本岡山ステーキ<br>会長: 小山 茂美    |
| ● 名古屋東ステーキ豊田ワード<br>ビショップ: 降旗 誠   | ● 大阪ステーキ大和郡山ワード<br>ビショップ: 武村 貴史 | 第一顧問: 山根 康弘<br>第二顧問: 馬場 慈哉 |